

# ジャック・ラカンにおける「部分的なもの」 —ファルス、欲望、アガルマ、欲動—

桑原 旅人

## 要旨

Cet article traite une transition théorique de la totalisation au « partiel » chez Jacques Lacan au point de quatre concepts (le *phallus*, le désir, l'*agalma*, la pulsion). Le *phallus* dirige le sujet vers le symbolique en donnant « le Nom-du-père », la totalité du système signifiant. À la suite de cela, il peut se construire un personnage. Les problèmes du désir sont principaux chez Lacan. Il est formé au-delà de la demande, et se situe entre le symbolique et le réel. Alors nous ne désirons pas le désir de l'Autre, mais la destruction de l'Autre en tant que trésors du signifiant. Et l'*agalma* devient la cause du désir à la place de l'Autre. L'*agalma* qui est l'éclat éveille le désir du sujet. Cependant, le concept de la pulsion devient plus important que le désir dans son Livre XI, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. Ce concept dans le réel vise la mort du symbolique. Certes, la relation entre ces deux topologies est réciproque par le « fantasme », mais les concepts de « partiel » chez Lacan représentent un fragment du réel.

**キーワード** : ラカン, ファルス, 欲望, アガルマ, 欲動

## 1. はじめに

本稿は、ファルス・欲望・アガルマ・部分欲動という四つの観点から、ジャック・ラカンが全体化を可能にするファルスの優位から「部分的なもの」の強調へと理論的に変遷していったことを明らかにする。たとえばイギリスのラカン派であり、現代フランス哲学の研究者であるロレンゾ・キエーザが指摘しているように<sup>1</sup>、これまでラカンはファルス-ロゴス中心の男性優位の擁護者としてわかりやすい悪役のように語られることが多かった。具体的には、エレヌ・シクスー、リュス・イリガライ、ジュディス・バトラーなどが上記のような観点からラカンを批判している。もちろん、ラカンの理論においてファルスが重要な役割を果たしていることそれ自体は事実である。しかし、その重要性は彼の理論が「象徴界から現実界へ」と変遷をしていくにつれて弱まっていく。全体化することによってあらゆる物事を統合的に処理しようとするファルスの「象徴界」から、「部分的なもの」の多数性によって存在する「現実界」へと彼の理論的な重心は移

っていったのである。ただ、ジャック=アラン・ミレール<sup>2</sup>や彼の立場に従うポール=ローラン・アスン<sup>3</sup>、向井雅明<sup>4</sup>などがそう整理しているように、これまでこの移行は、59年から60年にかけて行われた『精神分析の倫理』を端緒として、63年から64年の『精神分析の四基本概念』から具体的な形で主題化されるとされてきた。しかし、本稿ではそれがより早い段階の57年から58年の『無意識の形成物』の時点から生じているという立場をとる。ラカン派においても広く共有されているわけではないものの、このような主張そのものはキエーザがすでに指摘しているが、彼が「大他者の大他者は存在する」から「大他者の大他者は存在しない」への移行、そしてその帰結としての「対象 a」を強調するのに対して、本稿は大他者への不信による「破壊」という主体の能動的な契機を重視し、そうした行為の結果として生じる「大他者の部分化から欲動へ」という結びつきに着目した。くわえて、キエーザが重要視しなかった対象 a のより原型的なものとしての「アガルマ」をラカンの理論的変遷の重要な概念として取り上げる。

## 2. シニフィアン体系の総体としての〈父の名〉

ラカン理論において主体を全体性のもとに統括する概念が「ファルス」であったということに疑いはないが、より正確にそれは彼の想定する枠組みにおいてどのような働きをするものであったのか。ラカンは56年から57年にかけて行われた『対象関係』の講義録においてこの問題を検討している。我々がファルスという概念を思考していく上でまず考慮しなければならないのは、それが現実的なものとしてのペニスといかなる関係にあるのかということである。ファルスはペニスそのものとして存在するものではないが、けっして無関係と言い切れるものではない。じじつ、ラカンは陰嚢を除いた勃起したペニスのイマージュがファルスにおいて根本的なものであると述べている<sup>6</sup>。ファルスはあくまで男性的なイメージとしてのペニスに由来するものでしかない。しかし、ファルスはペニスから截然と切り離されてもいる。

それではこの二つの差異はどこに存在するのだろうか。ラカンにおいて、ペニスは現実的なものであると同時に、想像的なものでもある。たとえば、男児は去勢への不安からペニスを奪われてしまうのではないかと考え、反対に女兒はペニスを所有することができないがゆえに、それが将来、誰かから与えられるのではないかと妄想する。つまり、「ペニスをもっていたり、もっていなかったりという事実」<sup>7</sup>が存在するのである。去勢という行為が想像的な次元を対象とするがゆえに、このような着脱可能なものとしてのイメージはペニスを想像的な平面に置く。これが、「想像的ファルス」と呼ばれるものである。子はファルスを母との関係から学ぶ。母にとって子はたんに子であるというだけでなく同時に、ファルスとしても機能する。象徴的なものとしてのファルスの意義を理解していない段階の子は、自らがファルスとしての役割を負わされているということには気づいていない。しかし、母は子をファルスとの密接な関係をもつものとして捉え、

ファルスとしての子に満足を見いだそうとする。

母にとってファルスは欠如しているものであるが、それはあくまで剝奪による「想像的損失」<sup>8</sup>であり、子がその欠如を補う存在として母に想定されている。子は母との想像的な関係に留まっている時期には、自身の身体的な全体性が十全に愛されていると感じている。しかし、子はある時期に愛されているのは自分ではなく、その向こう側にある何か別のものであるということに気づき始める。つまり、母によって本当に愛されているものは自分自身ではなくファルスである、ということを理解しなければならなくなる瞬間が子に訪れるのだ。母と子のあいだには、この根本的な不調和によって亀裂が入れられている。母はけっして無条件に子の存在すべてを愛せるわけではない。ラカンは、「[...] 母にはこのファルスが欠如しており、母は子供以外のものを欲しているだけでなく、文字通り欲望するものである、つまりその力という点で全能ではないということが、主体にとって何よりも決定的になる」<sup>9</sup>と述べている。子はある種の義務として「母の向こう側に、母によって愛されているもの」<sup>10</sup>を見つけださなければならないが、それは「母のファルスへの欲望」<sup>11</sup>である。

以上の説明によって、母—子—ファルスという三つ組の理論が整理された。この三つ組は子が象徴的な秩序へと参入する手前の段階である前オイディプス期の親子関係を表象している。ラカンはこれに加えてオイディプス・コンプレックスの解決のために、四項目の要素が必要とされると考えていた。子は自身の全体性が母によって完全なかたちでは愛されないことに対して大きな失望を感じる。母は自分だけを愛しているのではなく、別の何らかの対象にも強い関心を向けている。子が自分以外の母の欲望の具体的な対象として想像するのが「父」である。このような認識が生じることによって、子は父との敵対関係へと入っていく。父は子にとってライバルであり、子は父と立場を入れ換えようと試みる。この関係のクライマックスにおいて与えられるのがいわゆる〈父の名〉であり、それを授与されることが、主体がオイディプス・コンプレックスを解決するための唯一の方法として示される。〈父の名〉とは、「大他者のなかの大他者 *Autre dans l'Autre*」<sup>12</sup>として「法」の機能を果たすために存在するものである。また、父が「名」であるというのはそれが機能するための絶対条件である。〈父の名〉は、けっして生きた父であってはならず、殺された者としての「死んだ父」<sup>13</sup>でなければならない。フロイトは、「トーテムとタブー」において、すべての女を独占する父に対して嫉妬した息子たちが協力して〈父〉を殺すという神話を創り上げた。このような全能の父をラカンは、「想像的父 *père imaginaire*」<sup>14</sup>と呼んでいる。ラカンが、「自らを絶対的の主人として示すことは、象徴的父に属することではなく、想像的父に属すること」<sup>15</sup>であると述べているが、この種の父はある意味で非常に理想化された厳粛で威厳のある父として、一般的に我々が表象するイメージであると言える。このような想像的父に対する殺人の罪責感が道徳的審級である「超自我」を誕生させたのだとフロイトは主張していたが、ラカンは想

像的父の殺害によって象徴的父が形成されると考えている。

象徴的な去勢によって〈父の名〉を与えるのは、想像的な父ではなく象徴的父であり、また現実的な父である。ここで重要であるのは最終的に去勢を下すのが象徴的な父であるのだとしても、現実的な父が僅かであっても役割を果たさなければならないということである。ラカンは、「現実的父が、去勢者としての父の機能を具体的かつ経験的な形で引き受けなくてはならない」<sup>16</sup>と述べている。

では、その具体的な現実的父の役割とはどのようなものであるのだろうか。それは、「嫉妬深い者／羨望者 jaloux」<sup>17</sup>としての機能である。現実的父は母子の密接な想像的關係に嫉妬し、それを引き裂こうとする。かりに現実的な父がこの機能を果たさないとすれば、子は永遠に母へと固着し、〈父の名〉を獲得するという経験から引き離されてしまう。現実的父は母子一体化の關係に亀裂を入れ、母子による近親姦に対する禁止の法を象徴的に与えなければならない。この法の確立こそが、シニフィアン体系を総合化し、取り仕切る〈父の名〉を子に与え、彼らを象徴的秩序へと導き入れる。ラカン理論の想定では、このような発達過程によってこそ主体は全体化される。

したがって、たとえばジル・ドゥルーズが「何を構造主義と認めるか」において図式化したような<sup>18</sup>、〈父の名〉という「象徴的なもの」を「想像的なもの」から峻別し、その理論の最上位に位置づける構造主義者としてのラカンという像は、『対象關係』の講義録までの議論には十全に当てはまると言わざるを得ない<sup>19</sup>。しかし、この「象徴界の優位」は、翌年の『無意識の形成物』において「欲望」という概念が「ファルス」と〈父の名〉に代わって前景化することによって徐々に揺らぎを見せ始める。

### 3. 要求と欲望の区別

ファルスや〈父の名〉といった象徴界に関わる理論と共に、ラカンにおいて重要となる概念が「欲望」である。ラカンはこの問題を『無意識の形成物』において主題化している。ラカンの精神分析において欲望は、主体の本性としてその役割を十全に利用しようとしなければならないものとしてある。しかし、精神分析以前の哲学・倫理学及びキリスト教は、欲望とシニフィアンを切り離し、前者を抑圧してきた。ラカンは以下のように述べている。

[...]「アカデメイア化」というのはそこで古代哲学の系譜の一つを指しているわけですが、この系譜はプラトン哲学からストア派やエピクロス派まで、そしてキリスト教を通して、ある根深い傾向をもっていました。それは欲望とシニフィアンとの有機的関係を忘却し、シニフィアンから欲望を排除し、それを縮減し、ある種の快樂のエコノミーのなかに動機づけ、そのなかにある絶対的に問題をはらんだ、還元不可能なもの、厳密に言えば倒錯したものを巧みに避ける傾向であり、また人間

の欲望のさまざまな現れの本質的で生き生きとした性格—その筆頭にあげるべきは、単に不適応かつ適応不可能であるばかりではなく、根本的に徴づけられてもいるというその性格なわけですが—それを巧みに避ける傾向です<sup>20</sup>。

精神分析以前の広義の思想史においては、何かを欲望するということが短絡的に快楽と結びつけられてきた。欲望の一側面でしかない快楽を欲望全体と同一視し、それを完全に捨て去ることが善であるものとして語られたのである。しかし、ラカンの欲望概念は禁欲主義とも快楽主義とも重ならない領野に位置する<sup>21</sup>。

ラカンにおける欲望を語る上でまず行わなければならないことは、それを要求との差異において捉えることである。要求は第一に、フラストレーションの結果として生じる。ラカンによればフラストレーションとは、「想像的損失」に対する「復権要求」である<sup>22</sup>。フラストレーションが想像的であるということは、主体が何かの対象が与えられれば満足を得られるというわけではないということ意味する。その結果として要求は、「際限のない無法な希求」<sup>23</sup>になる。だからこそ、それは前言を翻す「違約 *débit*」<sup>24</sup>とならざるを得ない。限界がないために要求する主体はつねに応答に対して、「本当に私が欲しいものはそれじゃない」と駄々をこねて与えられたものの受け取りを永遠に拒否し続け、対象を次から次へと換えることで満足の可能性を追求することを止めようとししない。ただ、この要求には宛先が存在している。それは、「大他者 *Autre*」である。要求はつねに大他者への要求である。したがって、大他者は要求する者に対して必然的に優位な立場に置かれる。

ではこの特権的な大他者とは一体どのようなものであるのだろうか。ラカンはそれを端的に「母」であると述べている<sup>25</sup>。要求がかりに成就するということがあるのだとすれば、それはすなわち母を占有することを意味する。主体における大他者と要求の関係は、シニフィアンの介在によって行われるが、それはその代理として大他者に要求をメッセージとして伝える。ここに大他者が母であるということの根拠がある。つまり母である限り、実在的な場における大他者はパロールによって主体をあやし、話しかける存在でなければならないということである。

ラカンはこの「話す」という役割が大他者としての母という機能にとって本質的なものであると主張している<sup>26</sup>。主体の要求が大他者としての母にむけられているということは、その要求が満足のための具体物をもたないものとしての「愛の要求 *demande d'amour*」<sup>27</sup>であるということに結びつく。要求とは愛の要求であるということが、それを生物学的な意味での身体を満足させることを目的とする欲求から区別する。ここにも要求の想像的な地位が刻印されている。要求の本質はあくまでも愛という想像化された幻想に対する願望を叶えることにある。

ラカンにおいてこの「想像界」はよく知られた「鏡像段階論」によって説明される。

彼によれば、生後六ヶ月から十六ヶ月程の子どもは鏡を前にすることによって自己の姿をはじめて認識する。そして幼児は歓喜しながら鏡に自身の動作を写し、映った自分もしくは周囲との関係性を認識する。つまり、幼児は虚像的な複合と実在性との関係を鏡によって体験するのである。我々はこうした鏡との接触によって、自己固有性の認識を獲得していく。こうした自己固有性のあり方は、近代的な主体のあり方と鋭く対比される。「この精神分析の経験（＝鏡像段階）は我々を〈コギト〉から直接由来するすべての哲学に対立させるものだと言わねばならない」<sup>28</sup>とラカンは言う。鏡像的な主体は、鏡の機能によって間接的に獲得されるに過ぎない。我々の「自己身体のイマージ」は、つねに想像的に感受される現実ではない「理想自我 *je-idéal*, *Ideal Ich*」としてのみ成立し、個人は虚像としての自己だけを認識する<sup>29</sup>。ゆえに、自己の本当の姿を享受できない人間は、パラノイア的なものの亡霊から逃れることのできない非十全な存在であると言える。このような状況を補うためにこそ、ひとは心像にある自我のイメージの理想を *I(A)* としての大他者に求める。理想的な大他者は、自己にとって完全ではない自我を代補的な役割として支える。

要求がつねに大他者として〈母〉との想像的關係において成立するものなのであるのに対して、欲望はまた別の領域に存在している。要求は欲求を欲望へと橋渡しするための中継地点であるのだが、欲望はその「要求の彼方」<sup>30</sup>に形成されるものであり、ある彼岸にかかわる。つまり要求と欲望の最も大きな違いは、後者がシニフィアンでありながらも、現実的なものに関与するという点にある。ゆえに、欲望は「象徴界」と「現実界」の橋渡しをする機能をもつと指摘できるかもしれない。実際、ラカンは「欲望がシニフィアンの宝庫、コードの座としての大他者」<sup>31</sup>に密接的なかたちで結びつくことを強調している。要求における大他者への関係がイマージュの世界に留まるのに対し、欲望のそれへの関係は、決してシニフィアンから分離できないものである。大他者はすべてのシニフィアンの発生源であり、その結果としてシニフィアンによる「欲望の屈折 *réfraction du désir*」<sup>32</sup>という事象が起きる。つまり、解釈することを必要とする欲望はシニフィアンによって歪められているのである。ゆえに、それは必ずしも主体が願った原初的なものがそのままのかたちで現実化するとは限らない。だからこそ、「欲望は、欲望が最初そうであったものとは異なるシニフィエとしてやって来る」<sup>33</sup>と言えるのである。シニフィエはシニフィアンと欲望との単線的ではない複雑な要素が纏れ合うその帰結として表現される。また欲望が象徴界との関係によってのみ成立するという点も、欲望の本質的な自然性を否定することでもあるため、このようなシニフィアンの宝庫としての大他者への依存は、我々が真に何を望んでいるかを分からなくさせてしまうことでもある。

#### 4. 「大他者の破壊」と輝き=破片 (éclat) としての「アガルマ」

精神分析においてもっとも重要な概念の一つが「無意識」であるということには疑いがないだろう。そして欲望は、再現前の表象システムには還元できない無意識のなかに存在している。しかし、すべての欲望がその内部に入り込めるわけではない。ラカンは、「意識に入ることができる欲望とは、象徴化されたことによって、無意識のなかに入る際に象徴的な形態、すなわち破壊することのできない痕跡という形態で保存され得るようになっていく欲望だけ」<sup>34</sup>であると述べている。欲望はシニフィアンというかたちによって象徴化されることでしか無意識にはなれない<sup>35</sup>。

その具体的な例が「夢」や「症状」である。夢は無意識の欲望を表しているが、その構成要素の一つ一つはシニフィアンである。それとしての欲望は多様であり、意識する自我という統合領域からつねに逸脱しようとする。症状も夢と同様に、つねに分節化可能なシニフィアンとして現れる。症状がある一定のところまではその機能によって可視化できるからこそ「分析」という営みが可能になる。

また、無意識の構造において枢要な部分を占めるのは、あらゆる抑圧された欲求の貯蔵庫とされる「エス」である。ラカンはこのエスという領域を根元的な欲求の吹き溜まりとしてだけ捉えることに対しては否定的である。彼にとってエスはシニフィアンによって構成されるものとしての欲望の彼方に現れるものである。エスは、「もっぱら極限においてのみ現実化」<sup>36</sup>される欲望によってさえ言い表すことができない領域として場をもつ。ゆえに、エスを言語活動に完全なかたちで内包させることはできない。ただ、我々は同時に、エスという領域を言語活動によってしか把握できないという限界にも直面しなければならない。言語活動の供給源としての大他者という存在の重要性がここにおいて際立つ。

「本質的欲望とは、大他者の欲望の欲望、あるいは欲望されたいという欲望である」<sup>37</sup>という有名な定式がある。それは現前する小文字の想像的他者に望まれたいということではなく、不可視の〈大他者 *Autre*〉に承認されたいという欲望のことを意味する。嫉妬・憎悪・憤怒といった攻撃性や不満・固着といった心的傾向は、すべて「大他者の欲望に対する主体の原初的な依存」<sup>38</sup>という観点から説明されるべきであるとラカンは考えていた。そして彼は、「ある一個の大他者をすっかり我がものとする *c'est d'avoir un Autre tout à soi*」<sup>39</sup>ことを「愛」と呼んでいる。つまり、大他者を自身の手中におくことによって不満足の状態を完全に解消しようという無謀な試みが、ラカンが「愛」とするものの一つなのである。

しかし、欲望はこのような極限的な同一化を目指すものとしての「愛」とは位相を異にする。欲望はまず要求を基盤とする。多種多様な欲求が、シニフィアンと結びつくことによって（愛の）要求が生成する。しかし、欲求の象徴化はそれが真に求めているものを削ってしまう。欲望は欲求が要求に出会うことによって不可避免的に生まれてしまう

残余であり、あくまで要求の「彼岸」にこそ存在するものである。ラカンは欲望を「愛の要求から欲求の要請をいわば引き算した結果」<sup>40</sup>であると表現している。くわえて、彼は愛の要求という観点からみれば欲望は性的欲求であると主張する<sup>41</sup>。性的なものの前景化が精神分析を人々が忌避する最大の要因の一つであるのだが、欲望はあくまでもそこから生じてくるということを主体は回避することができない。たとえ欲望のすべてが性的なものに還元できるのではないとしても、それはけっして脱性化され得ない。

ただ、シニフィアンの宝庫の力によって成立するはずの欲望は、最終的に「大他者の次元の放棄」<sup>42</sup>へと向かう。主体は象徴界を見限ろうとするのである。こうした事態は、象徴界から現実界への第一歩であると言える。たとえば、上述したようにこれまでのラカン研究において、この「象徴界から現実界への移行」は、六〇年代半ばから本格化するとされてきたが、ラカンは、「私の口からどうぞお聞きください」と皮肉めいた前置きをしながら「すべてが言語活動に還元できるわけではない *tout n'est pas réductible au langage*<sup>43</sup>」（傍点著者）と明言している。つまり、ラカンにおける構造主義的な意味での言語優位の傾向からの離脱は、これまでラカン派が考えていたよりも以前の『無意識の形成物』にその転換点が存在するのである。

いずれにせよ、主体は欲望のすべてを言語によって表現することができないという制限のなかにいる。そしてまた、シニフィアンの宝庫としての大他者への同一化から免れようとするのが欲望の根底的な性格であり、だからこそ逆説的に、「言いくるめる、口説く [べらべらとしゃべりまくる] *baratin*」<sup>44</sup>ことが言語によって最も欲望に接近する方法になる。伝えようとするものが言葉を尽くしてもうまく伝えられないということによって否定的なかたちで伝わるのが性的なものとしての欲望の表現方法であるのだ。ただ、ラカンにおける性的なものを考えるときには注意しなければならないことがある。それは性的な欲望がつねに、部分対象を欲望することに留まるということである。ピエール・ブリュノが指摘しているように<sup>45</sup>、この部分対象はけっして全体化を要請するものとしての象徴的ファルスと並列され得ない。ラカンにおいて象徴的ファルスは、つねに不在であることによって意味をもつ。じじつ、62年から63年にかけて行われた『不安』の講義録において彼は、「ファルスは、現前することによってよりも失墜した対象の可能性によって人間に体験されるなかでより重要性をもち、欲望の歴史における去勢の場の可能性を指し示す」<sup>46</sup>と述べている。つまり、去勢と同一視されるファルスは存在しないものであり、現実的なものとして主体に外在する部分対象とは異なった位相にあるのだ。

ラカンは全体対象を欲望するという仕方での性的成熟を強く否定するが、ここにもある困難が存在する。大他者の本質は、愛を気まぐれに与えたり、与えなかったりするという主体に対する特権性にある。そして、その愛は無償なものであり、けっして失われることはない。大他者の欲望を欲望ということは、無限の力を所有する全体的対象としての大他者への承認と従属であり、主体は奴隸的立場へと追いやられる。このよう



な袋小路に陥った結果として、ヒステリー者や強迫神経症者に代表される精神分析的な主体は、「大他者それ自体の否定」あるいは「大他者の破壊」へと向かう<sup>47</sup>。その過程において主体の大他者への信頼（すなわち「象徴界」への信頼）は、確実に失われていく。

ラカンの理論において、『対象関係』までは信じられていたように思える大他者は『無意識の形成物』ではその絶対性を失っており、破壊されるべき存在に格下げされているとするなら、欲望はどのように喚起させられるべきであるのか。60年から61年にかけて行われた『転移』の講義録において彼はそれを「アガルマ」<sup>48</sup>に見いだしている。

ひとが欲望するには何らかの、特権的な対象の存在が必要不可欠である。よく知られるように、「ポロメオの環」<sup>49</sup>において、そのような対象は想像界・象徴界・現実界の中心にあるものとして「対象 a」と名づけられる。そして、この対象 a のより原初で素朴なかたちこそが「アガルマ」である。ラカンはこの語に「gal」という古いフランス語で「輝き」を意味する語が含まれていることに着目している<sup>50</sup>。アガルマがある種の輝きを放つからこそ、主体は対象を欲望することができる。ラカンにおいて、この「アガルマ」が大きな問題となるのは、分析家たちがそれを部分対象として発見したからである。アガルマは、あらゆる物事を統合するようなものとしてひとの欲望を惹起する存在ではない。輝きは現代のフランス語で「エクラ éclat」と書かれるが、それは同時に破片を意味している。つまり、「輝き=破片 éclat」としてのアガルマは断片であり、砕かれていて、そのためにあらゆる全体化の要請を回避することができるのだ。

具体的なものとしてのアガルマは、ある主体の存在そのものではなく、乳房であったり、声であったり、糞便であったりする。欲望の秘密がこのような種類の部分対象であるゆえに、それは「哲学の弁証法からは接近不可能であり、取り扱い不能であるために、哲学によって除外され、中傷され、見捨てられた領野」<sup>51</sup>になる。しかし、哲学的言説の一般性は、部分対象の個別性と特異性の前では無効化される。

ラカンは『不安』の講義録において、「アガルマ」は、「現実界に存在している愛」<sup>52</sup>に関わろうとするときに、主体にとって問題になるものであると主張している。アガルマは対象 a よりも深い現実界に位置している。そしてこのアガルマを原型として想像化、象徴化されながら形成される対象 a は、「欲望の目的、目標ではなく原因である」<sup>53</sup>。それは主体を何らかの目的へと誘導し、統合的に機能させる効果をもつものではけっしてない。主体は現実的なものとしての真理を目指すのではなく、砕かれた不完全で不調和なものとしてのその破片によって、むしろ操作されている。

いずれにせよ、この「輝き=破片 éclat」としてのアガルマの分析は、『精神分析の四基本概念』における欲動理論の端緒となったものであるという点において重要な役割を果たしていると言える。

## 5. 部分欲動

これまでのラカン批判の多くは、彼をファルス=ロゴス中心主義者に還元してきた。そのなかでも現在、特に影響力をもつ論者のひとりと言えるジュディス=バトラーは、『ジェンダー・トラブル』において、ラカンの議論をファルスの不可能性によって〈法〉を打ち立てる象徴界の理論として整理した上で、それを男根主義的でロマンティックな理想主義として断罪している<sup>54</sup>。このようなラカンへの批判的言及は、立場こそ異なるもののバトラーに先行する世代であり、女性性を複数的なものとして捉え、男性的な視点からの単一的なその理解に異議を唱えたイリガライ<sup>55</sup>や真理への志向性をファルスの男根中心主義とするデリダの立場に同調し<sup>56</sup>、それへの対抗手段として「エクリチュール・フェミニン」を掲げたシクスー<sup>57</sup>らから連綿と受け継がれ、常套句化している。もちろん、すべてに同意できるわけではないとしても、彼女らの主張が必ずしも正当性を欠いているという訳ではない。その功績は十分に認めなければならない部分がある。しかし、問題であるのは積極的に取り入れつつも、明示あるいは黙示に批判の対象となっているラカンの議論の解釈が、彼の理論を十分に調査、吟味しないままその一部を切り出した恣意的なものになっているということである。実際に『無意識の形成物』以降、「象徴界から現実界」へと彼の理論的重心が変遷していくその帰結として、ファルスや〈父の名〉といった議論は背景に退いていくが、このような指摘は上記の先行研究には存在しない。そしてこの移行が一つの理論として明確化するのには、『精神分析の四基本概念』においてである。ここでは欲動の問題系が一つの主題とされている。

欲動は、科学のディスクールのなかにフロイトが組み入れたものであるが、ラカンは欲動をその分野における他のさまざまな「基本概念」と等価なものであるとする<sup>58</sup>。欲動概念を理解する上で、第一歩になるのは、それを空腹やのどの渇きといった欲求の次元と混同してはならないということである。欲動は外部からの影響によって一時的に沈静化するような種類のものではない。欲動の最大の特徴は、「恒常的な力」<sup>59</sup>にある。それは休むことなく、つねに主体に影響を与えている<sup>60</sup>。ここで問題となるのは、欲動が一体何を目指すのかということであるが、それは主体の現実界への接近を可能にするものとしての「対象 a」である。たとえば、性愛関係は相手の身体を対象としているように見えるが、実際には欲望の原因としての対象 a を欲望しているのであり、たんに器質的な欲求を満足するものとしての対象への欲望のようなものからは区別されるべきである。したがって、欲動と対象の関係性を記述するもっとも正確な言い方は、「欲動がその周りを巡る」<sup>61</sup>ということになる。なぜなら、対象 a は「幻想」の式としての「 $S \diamond a$ 」のなかに含まれ、けっして獲得することのできないものであるからだ。

欲動を理解するうえで、もう一つ認識しておかなければならないのは、それがつねに「部分欲動 *pulsions partielles*」に留まるということである。部分欲動の機能は、上述したアガルマのそれと相関的である。たとえばフロイトは『性理論三篇』において性欲動の

本質を「多形倒錯」としていたが、これは、欲動が無意識の理論と重なり合うことを意味する。つまり、無意識が分節化されたものとしての言語によって寸断されているように、欲動も「裂け目の構造」<sup>62</sup>として存在するのである。欲動はけっして統一的な全体性として存在しているのではなく、アガルマのような断片の組み合わせによって顕現するものである。実際、ラカンはフロイトに依拠しながら以下のように述べている。

無意識の拍動によって交互に現れたり隠れたりする主体において、我々は部分欲動だけを把握します。「全体的性衝動 *ganze Sexualstrebung*」、つまり性的欲動全体の表象ですが、フロイトはそんなものはないと言っています。私はこの解答方針に基づいて、彼に続いてあなた方を導いていきます。そして、私が自身の分析経験から学んだことすべてもこの結論を否定するものではない、ということをはっきりと言っておきます<sup>63</sup>。

我々の意識は、つねに瞬間に起こることだけを把握する。斜線を引かれている主体は、欲動を部分欲動として以外に見出だすことなどできない。しかし、そうであるがゆえにこそ、「部分欲動の多様性」<sup>64</sup>が担保される。欲動がバラバラであるからこそ、その結合のやり方によって、主体は自分自身の特異的な「性」のかたちを表現できるとも言えるだろう<sup>65</sup>。そして、ラカンは上記のような対象 *a* をめぐる欲動の循環運動の目標を大他者に置いている。ラカンは、「欲動のポケットを表象するこの U ターンにおいて、それは性感帯に嵌り込みながら、大他者のなかでその都度、応答する何かを求めにいく責務を負わされているように思われませんか」<sup>66</sup>と投げかける。大他者には欠如が存在しているために、主体は終極に辿り着くことができずに逆戻りしてしまうのだ。この欠如は、「*S(A)*」と定式化されている。たとえば、『欲望とその解釈』においてラカンは、以下のようにこの概念を説明していた。

斜線を引かれた大文字の *A* は以下のようなことを言いたいのです。*A* のなかに——それは存在ではなく、発達した形式のもとでのパロールの場、応答する場、シニフィアンのシステムの総体、すなわち言語活動 *langage* のことです——何か欠如があります。*A* に欠如をなすこの何かは *S*、つまりシニフィアンとしてしか存在できません。大他者の次元で欠如をなすシニフィアン、*S(A)* に最も決定的な価値を与える形式はそのようなものです。いわば、それは精神分析の大いなる秘密です。大いなる秘密、それは大他者の大他者は存在しない。<sup>67</sup>

*S(A)*と表記されるこの大他者の欠如のシニフィアンは、後期ラカンにおいて *S1* という記号と共に導入される主人のシニフィアンが実体をもたないことに由来するものである。

実際、69年から70年にかけて行われた『精神分析の裏面』において、ラカンはS1を「主人のシニフィアン」として詳細に論じている。彼は、「主人の本質、それはまさに彼が望んでいるものを知らないことである」<sup>68</sup>と述べているが、すなわちそれは主人が全知の存在としてすべてを司る存在ではなく、何も知ることのできない不能なものであるということの意味する。したがって、「主人は去勢されている」<sup>69</sup>とさえ言うことができる。ただ、ラカンはここで、もう一つの欠如の存在様態の重要性について言及している。その欠如とは「死」である。

現実的な欠如、それは生者が自身の一部によって、有性の方法で再生産することで失うものです。この欠如は現実的です。なぜなら、それは現実的なものの何かに近づくからであり、また生者、すなわち性の主体であることは、個々人の死に触れることであるからです。<sup>70</sup>

大他者が欠如のシニフィアンによって記されているのと同じように、「現実的欠如」が欲動によって構成された有性の存在に死という限界と結果を与える。「部分欲動は徹頭徹尾、死の欲動であり、欲動が有性的生命体の中で代表しているのは、死の部分にほかならない」<sup>71</sup>のである。ただ、この死は生物学的身体の死と共にシニフィアンの死、すなわち象徴的なものの死を同時に狙う。欲動の現実的な力は「象徴界」の安定性を揺るがそうとするのだ。たしかにラカン理論においてこの「現実界」という概念は、もっとも問題含みなものと言っても言い過ぎにはならないだろう。しかし、言説による解釈を拒もうとするこの「現実界」の領域を少しでも分節化しようと試みることは必要なことであるように思える。ラカンは、「現実界」という場を設定することによって、精神分析が単なる「メタ心理学」あるいは「超越論的心理学」に還元されてしまうことを回避しようとした。じじつ、ラカンは以下のように述べている。

[...] 精神分析が我々に「人生は夢である *le vie est un songe*」というような警句を信じ込ませることはけっしてあり得ないということを理解することによって、その第一歩からこの経験に描かれているものに立ち返ることで十分です。分析ほどに経験の核心において現実界の核に存在するものへと方向づけられている実践はありません<sup>72</sup>。

上述したように、「すべてが言語活動 *langage* に還元できるわけではない」のであり、主体におけるいかなる苦痛の経験も精神分析は、けっして矮小化しない。そして、ラカンはフロイトにとって最も重要であった探求は、「現実界」であったと断言してさえもいる<sup>73</sup>。それはラカンにおいても同様で、彼の最大の関心事は「象徴界」ではなく、「現実界」

であると言い切れる。もちろん「象徴界」や「想像界」が無用であるということではないが、それらは「現実界」との距離によって初めて意味をもつのである。

それでは、我々はどのようなかたちで「現実界」という領域と関わるのか。ラカンは、「現実界」と主体とがいかようにして出会うかということをもっと問題にする。そこでラカンは、アリストテレスに依拠しながら自動機械を意味する「オートマトン *automaton*」と運を意味する「テューケー *tyché*」という概念からその出会いを論じようとする。「オートマトン」をラカン理論に適用するならば、それは快原理によって支配される「シニフィアン連鎖」に相当する。あるシニフィアンが別のシニフィアンへと連なることによって「シニフィアンの網」<sup>74</sup>が形成される。このようなシニフィアン連鎖として解釈される「オートマトン」の彼岸にこそ「現実界との出会い *rencontre du réel*」<sup>75</sup>とラカンによって訳される「テューケー」がある。「現実界との出会い」が運としての「テューケー」であるということは、それがつねに「出会い損ない」であるということにつながる。主体が「現実界」を十全なかたちで経験するということが、それが不可能な場として設定されている以上ありえない。しかし、それでも「現実界」とまったく関係しないということもまた、主体には不可能である。だからこそ、ラカンはその場を「出会い損ない」と表現している。

では、「現実界」との関係が「出会い損ない」であるということが主体にどのような結果を及ぼすのか。それは、「外傷 *traumatisme*」というかたちで現出する<sup>76</sup>。心的な「外傷」は偶発的な経験によって、自分自身の精神世界のうちに「同化できないもの *inassimilable*」<sup>77</sup>が形成されることによる病である。「心的外傷」は、主体の自己同一性を動揺させる。内部に異物を抱えた主体は、それを解消するために、その経験を繰り返し想起しなければならない。それがいわゆる「反復強迫」と呼ばれるものである。しかしながら、これは主体がシニフィアン連鎖としての「快原理」から逃れることができないことから生じる問題である。主体は「想像界」や「象徴界」といったものの力に依存しなければ「現実界」を把握できないのであり、我々は幻想の関係を示す「 $\$ \diamond a$ 」という定式においてしか「現実界」と関わることはないのである。したがって、この二項は、「現実界が幻想を支え、幻想が現実界を守る」<sup>78</sup>という共依存的な関係性を形成していると言える。ただ、心的な外傷はそれを補償するためにこそ幻想を構成するのだが、このスクリーンは实在性を消去された非物質的な影ではない。なぜなら現実界は、「偶発事、小さな物音、实在性の切れ端によって表象される」<sup>79</sup>からである。それは単一的な欠如としての「全体的なもの」ではなく、「部分的なもの」の断片として複数的に存在する。

## 6. 結論

本稿はファルスの理論が練り上げられた『対象関係』から部分欲動の理論がひとまずの完成をみた『精神分析の四基本概念』までの理論的変遷を辿った。そしてラカンにお

ける象徴界から現実界への移行は、これまでそう思われてきたよりも早い段階（『無意識の形成物』）にその萌芽があるということ指摘し、「無意識は言語活動のように構造化されている」という彼のテーゼを強調するあまりに（ラカン派においてすら）無視されてきた「すべてが言語活動に還元できるわけではない」というラカンの断言に依拠しながら、主体による「大他者の破壊」を論じた。くわえて、先行研究ではあまり重要視されてこなかった「アガルマ」を「ファルスから欲動への移行」、すなわち「全体から部分への理論的変遷」の一つのきっかけとなるものとしてその価値を強調し、それが部分欲動の理論化の一端に寄与していることを示した。そして最後にこのような理論的変遷の帰結が「幻想」を介する主体と現実界の複数化した不調和な共存であることを示した。このようなラカンにおける「部分的なもの」の理論は、七〇年代以降の議論において、主体の特異性を担保する機能を果たす「サントーム *Sinthome*」なる概念に結実する。よって、その分析が今後の研究課題として残されている。

## 註

- <sup>1</sup> 「デリダはおそらく現前の形而上学を再導入する保守的なファルス中心主義者の主体を活性化するという一方で、誤ってラカンを批判している。」(Lorenzo Chiesa, *Subjectivity and Otherness: A Philosophical Reading of Lacan*, Cambridge, Mass, MIT Press, 2007, p. 5.)。
- <sup>2</sup> Cf. Jacques-Alain Miller, « D'un autre Lacan », *Ornicar* ?, no. 28, pp. 49- 58, 1984.
- <sup>3</sup> Cf. Paul-Laurent Assoun, *Lacan*, Paris, Press universitaires de France, 2003. [ポール＝ローラン・アスン『ラカン』西尾彰泰訳、白水社、2013年]。
- <sup>4</sup> Cf. 向井雅明『ラカン入門』、筑摩書房、2016年。
- <sup>5</sup> Chiesa, *op. cit.*, p. 107.
- <sup>6</sup> *Le séminaire IV: La relation d'objet 1956-1957*, Paris, Seuil, 1994, p. 49. [『対象関係(上)』小出浩之・鈴木國文・菅原誠一訳、岩波書店、2006年、57頁]。以下、ラカンの講義録からの引用は、巻数を略号とする。
- <sup>7</sup> IV, p. 175. [224頁(上)]。
- <sup>8</sup> IV, p. 49. [67頁(上)]。
- <sup>9</sup> IV, p. 71. [87頁(上)]。
- <sup>10</sup> IV, p. 358. [214頁(下)]。
- <sup>11</sup> IV, p. 358. [同頁]。
- <sup>12</sup> *Le séminaire V: Les formations de l'inconscient 1957-1958*, Paris, Seuil, 1998, p. 146. [『無意識の形成物(上、下)』小出浩之・鈴木國文・菅原誠一訳、岩波書店、2006年、214頁(上)]。
- <sup>13</sup> V, p. 146. [同頁]。

- <sup>14</sup> IV, p. 220. [31 頁 (下)].
- <sup>15</sup> IV, p. 276. [104 頁 (下)].
- <sup>16</sup> IV, p. 364. [222 頁 (下)].
- <sup>17</sup> IV, p. 402. [274 頁 (下)].
- <sup>18</sup> Cf. Gilles Deleuze, « A quoi reconnaît-on le structuralisme? », in *L'île déserte et autres textes : textes et entretiens 1953-1974*, édition préparée par Dvid Lapoujade, Paris, Minuit, 2002, p. 297. (ジル・ドゥルーズ「何を構造主義として認めるか」小泉義之訳、ダヴィド・プラジャード編『無人島 1969-1974』所収、小泉義之監修、河出書房新社、2003 年、59-102 頁)。
- <sup>19</sup> 構造主義に好意的だった時期のドゥルーズとシニフィアンの理論家としてのラカンの共通性を指摘した研究として次のようなものがある。Cf. Philippe Mengue, *Proust-Joyce, Deleuze-Lacan : lecteurs croisées*, Paris, Harmattan, 2010.
- <sup>20</sup> V, p. 311. [93 頁 (下)].
- <sup>21</sup> Cf. 快楽主義と欲望の関係については、立木康介による詳細な分析がある。(立木康介「快楽と幸福のアンチノミー」(富永茂樹編『啓蒙の運命』所収)、名古屋大学出版会、2011 年、448-449 頁)。
- <sup>22</sup> IV, pp. 36-37. [38-39 頁 (下)].
- <sup>23</sup> IV, p. 37. [39 頁 (下)].
- <sup>24</sup> V, p. 252. [5 頁 (下)].
- <sup>25</sup> V, p. 90. [130 頁 (上)].
- <sup>26</sup> V, p. 393. [214 頁 (下)].
- <sup>27</sup> V, p. 382. [197 頁 (下)].
- <sup>28</sup> Jacques Lacan, *Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je, Écrits*, Paris, Seuil, 1966, p. 93. [「わたし」の機能を形成するものとしての鏡像段階] (『エクリ I』所収) 宮本忠雄訳、弘文堂、1972 年、125 頁 (I)]。
- <sup>29</sup> Ibid., p. 94. [同書、124 頁]。
- <sup>30</sup> V, p. 393. [213 頁 (下)].
- <sup>31</sup> V, p. 148. [217 頁 (上)].
- <sup>32</sup> V, p. 148. [217 頁 (上)].
- <sup>33</sup> V, p. 148. [217 頁 (上)].
- <sup>34</sup> V, pp. 92-93. [133 頁 (上)].
- <sup>35</sup> ただ、無意識は象徴界に位置づけられるという一般的な定式に対して、たとえばラカン派の精神分析家であるコレット・ソレールは異議を唱え、それを現実界に位置づけている。Cf. Colette Soler, *Lacan, l'inconscient réinventé*, Paris, Presses universitaires de France, 2009.

- <sup>36</sup> v, p. 134. [196 頁 (上)].
- <sup>37</sup> v, p. 271. [34 頁 (下)].
- <sup>38</sup> v, p. 271. [34 頁 (下)].
- <sup>39</sup> v, p. 133. [194 頁 (上)].
- <sup>40</sup> v, p. 382. [198 頁 (下)].
- <sup>41</sup> v, p. 383. [199 頁 (下)].
- <sup>42</sup> v, p. 383. [198 頁 (下)].
- <sup>43</sup> v, p. 382. [198 頁 (下)].
- <sup>44</sup> v, p. 383. [200 頁 (下)].
- <sup>45</sup> Pierre Bruno, Fabienne Guillen, *Phallus et Fonction Phallique*, Toulouse, Érès, 2012, p. 45.
- <sup>46</sup> x, p. 197.
- <sup>47</sup> v, p. 383. [200 頁 (下)].
- <sup>48</sup> ラカンはアガルマを次のように表現している。「[...] 特権化された関心の印となるこの対象『アガルマ』となる対象があります。それは、生ける充溢へと個体が到来する際の中軸となる点の周囲にある、ここで身震いする個体の、中核にある真珠です。」(*Le séminaire VIII : Transfert 1960-1961*, Paris, Seuil, 2001, p. 263. [『転移 (下)』小出浩之・鈴木國文・菅原誠一訳、岩波書店、2015 年、34 頁]。)
- <sup>49</sup> 元来の「ボロメオの環」とは、十七世紀には北イタリアのマジョーレ湖一帯の土地を領有し、現在でも島々に名を残すミラノで金融業を営んでいたボロメオ家の紋章である。これは三つの環がしっかりと連結しているにもかかわらず、二つの環同士が結ばれていないために、ある一つの環の欠如によって全体がほどけてしまうという不可思議な構造をしている。ラカンはこの三つの環にそれぞれ想像界・象徴界・現実界を割り当て、この三界が相互依存的なしかたで成立していることを強調した。
- <sup>50</sup> x, p. 176. [221 頁 (上)].
- <sup>51</sup> viii, p. 180. [180 頁 (上)].
- <sup>52</sup> x, p. 128.
- <sup>53</sup> x, p. 365.
- <sup>54</sup> Judith Butler, *Gender trouble : Feminism and the Subversion of Identity*, New York, Routledge, 1990, p. 56. [ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社、1999 年、111 頁]。
- <sup>55</sup> Cf. Luce Irigaray, *Ce sexe qui n'en est pas un*, Paris, Minuit, 1977. [リュース・イリガライ『ひとつではない女の性』棚沢直子他訳、勁草書房、1987 年]。
- <sup>56</sup> Cf. Hélène Cixous, Jacques Derrida, *Voiles*, Paris, Galilée, 1998. [エレーヌ・シクスー、ジャック・



- デリダ『ヴェール』 郷原佳以訳、みすず書房、2014年]。
- <sup>57</sup> Cf. Hélène Cixous, *Le rire de la Méduse : et autres ironies*, Paris, Galilée, 2010.
- <sup>58</sup> *Le séminaire XI : Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1963-1964*, Paris, Seuil, 1973, p. 149. [『精神分析の四基本概念』小出浩之・鈴木國文・新宮一成訳、岩波書店、2000年、216頁]。
- <sup>59</sup> XI, p. 150. [218頁]。
- <sup>60</sup> 前掲したブリュノらは、欲動とファルスもまた区別すべきであることを強調していた (Bruno, Guillen, *op. cit.*, p. 38)。
- <sup>61</sup> XI, p. 153. [223頁]。
- <sup>62</sup> XI, p. 234. [234頁]。
- <sup>63</sup> XI, p. 172. [250頁]。
- <sup>64</sup> XI, p. 175. [255頁]。
- <sup>65</sup> たとえば、レオ・ベルサーニも『フロイト的身体』において、「部分欲動の多様性」という概念にセクシュアリティの再構築の可能性を見出だしている。Cf. Leo Bersani, *The Freudian body : Psychoanalysis and Art*, New York, Columbia University Press, 1986. [レオ・ベルサーニ『フロイト的身体——精神分析と美学』長原豊訳、青土社、1999年。]
- <sup>66</sup> XI, p. 178. [261頁]。
- <sup>67</sup> *Le séminaire VI : Le désir et son interprétation 1958-1959*, Paris, Seuil, 2013, p. 353.
- <sup>68</sup> *Le séminaire XVII : L'envers de la psychanalyse 1969-1970*, Paris, Seuil, 2005, p. 34.
- <sup>69</sup> XVII, p. 110.
- <sup>70</sup> XI, p. 186. [273-274頁]。
- <sup>71</sup> XI, p. 187. [274頁]。
- <sup>72</sup> XI, p. 53. [71頁]。
- <sup>73</sup> XI, p. 54. [72頁]。
- <sup>74</sup> XI, p. 68. [68頁]。
- <sup>75</sup> XI, p. 53. [72頁]。
- <sup>76</sup> XI, p. 54. [73頁]。
- <sup>77</sup> XI, p. 55. [73頁]。
- <sup>78</sup> XI, p. 41. [53頁]。
- <sup>79</sup> XI, p. 59. [80頁]。

